



特集
居ごこの
よい住まい
その4

京都
ならではの
新しい家の
かたち

ケーススタディ 平成の京町家 東山八坂通

生活空間としてはもちろん、風の通り道としても大きな役割を果たす、2階ロフト(手前)と太鼓張り障子。

木や石といった自然素材をふんだんに使い、新築の家ながら、風情ある表情を見せる。

住まいは暮らしとともにある。暮らしは地域とともにある。
家は、その土地で育まれた暮らしや文化に寄り添って
はじめて居ごこのよいものとなる。
しかし、古都・京都にあっても、住まいの多様化が、
まち並みや生活スタイルを様変わりさせているのが現状である。
四季の移ろいをたくみに取り込み、風や光を
肌で感じながら自然と共生してきた京町家の知恵を
今に生かした、新しい住まいのかたちを探る。

取材執筆／加藤しのぶ 撮影／喜多章





8戸の町家は別々に建て替え可能な住宅だが、敷地や建物躯体は区分所有法の共有部分となっており、管理規約が設けられている。そのため、低い塀の区切りはあるが、8戸が地続きになるよう配された奥庭(上)や、京町家の特徴の一つである屋根のケラバ重ね(中)、通常の戸建て住宅では難しい、まちなみ景観に配慮した外観(下)を可能とした。

「住む」のではなく、「住みたい」家——K氏にとって、たまたま訪れた8戸の新しい町家団地との出会いは、住まいへの認識を大きく揺さぶるきっかけとなった。

京都市東山区、古刹がひしめく地にその家はあった。周辺は古いまち並みが色濃く残るなかで、新築でありながら浮き上がることなく、しつくりと周囲になじんでたらずむ家。

「表の格子戸の風情が印象的でした」通りに面した格子戸の細い隙間を通してまず見えるのは広い土間と中庭。その先にある部屋は、壁ではなく障子や引き戸などの建具で仕切られており、建具を開放すれば、表から濡縁、奥庭までがまっすぐ見通せる。それは、そのまま風の通り道ともなっている。

この家なら住んでみたい。家探しをしていたわけでもなかったのに、なかば「衝動的に」購入を決意した。これまでに何度も住み替えは経験している。その多くは堅牢なマンションでの生活。機能的で快適な住まいを存分に知ったうえでK氏が選んだのは、「平成の京町家東山八坂通」と呼ばれる家だった。

「重ね着」という住まい方

「平成の」というと、伝統的な京町家とは別物の京町家「風」の家といった印象を受けるかもしれない。しかし、実のところ京町家は、明治から昭和の時代のなかでも変遷している。「平成の京町家」プロジェクトを進める京都市都市計画局住宅室住宅政策課の杉浦伸一氏と岡田圭司氏によれば、京町家はまち並みを形成する基本的な姿は変わらないながらも、暮らしの変化に合わせて、外観も



内部構造も少しずつ手直しされており、それぞれに「明治の」「大正の」「昭和の」と区別できる違いがあるという。それを踏まえての「平成の」なのだ。

「京都議定書」誕生地として、地球温暖化問題に先導的に取り組む京都市にとって、環境に配慮した「省エネ住宅」

の普及は必須課題である。しかし、高気密・高断熱に特化した断熱材入りの外壁で外と遮断された閉鎖型の家は、蒸し暑い夏を快適に過ごすことを宗とした開放型の京の家のかたちにはなじまない。

木や土や紙といった自然素材を使っ

た、風通しの良い伝統的な京町家の長所を活かしながら、まち並みになじみ省エネ性をも備えた家——平成の京町家が掲げる目標は高い。それを可能にするのが「環境調整空間」と呼ばれる空間づくりだ。

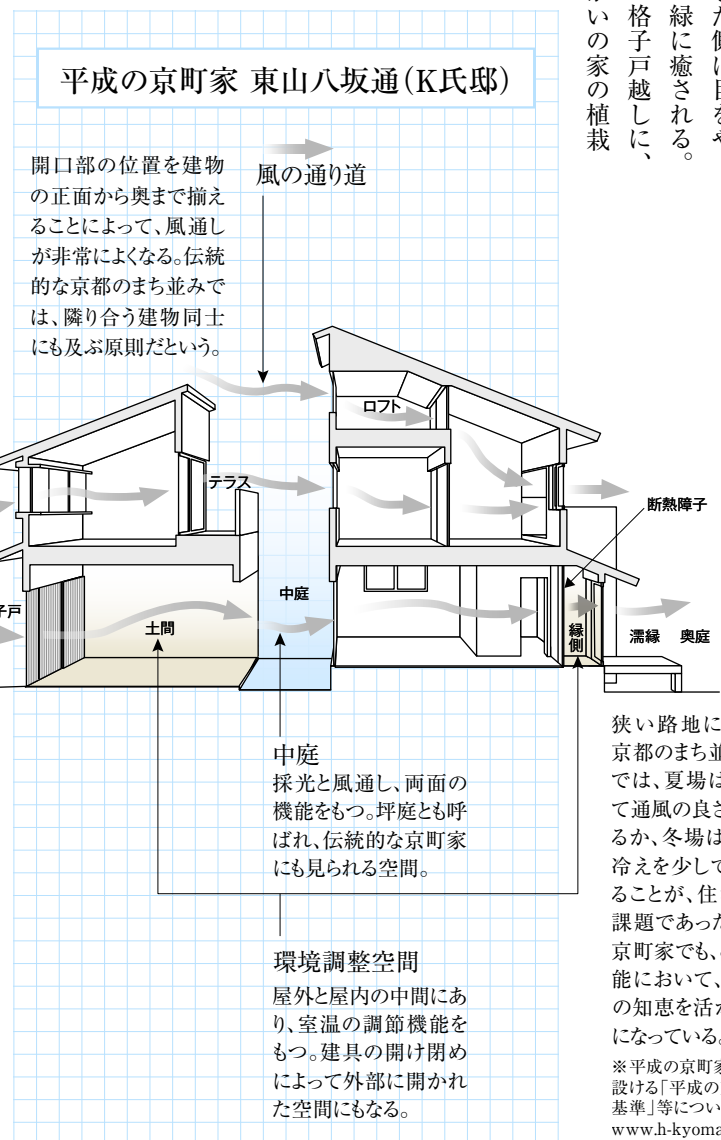
環境調整空間とは、屋内と屋外の間

「住みごたえ」を育む家

にもうけられた中間領域、例えば表に面して続く土間や奥庭に面した軒下や縁側などをさす。K氏邸の設計に携わった京都大学大学院の高田光雄教授によれば、「夏は少し暑く、冬は少し寒い空間」である。それを障子、襖、引き戸など複数の建具を開閉して調節することにより断熱を工夫する。いわば「厚いコートを着るのではなく、重ね着をする」ように住まうのだ。

実際に暮らしてみると、まず驚いたのは、夏の打ち水の気化熱がもたらす涼気が、ごく自然に室内に運ばれてくることだった。そして、K氏が環境調整空間の効果を体感したのは冬。暖房器具を入れた居間から、障子を開けて縁側に出ると、ずっと温度が下がるのを感じた。家の内と外で感じるほどに急激な変化ではない。縁側がなく奥庭と居間とがダイレクトに結ばれていたら、また建具の「重ね着」がなかったら感じ取れなかった繊細な身体感覚である。

重ね着という住まい手の工夫によって季節の移ろいを肌で感じられる空間。それは単なる断熱の工夫だけにとどまらない。例えば表の土間は、外からのプライバシー保護空間でもありながら、時に応じて近隣の人とのコミュニケーションスペースともなる。環境調整空間は自然と、人と、まちを自在につなぐ空間でもあるのだ。



狭い路地に囲まれた京都のまち並みのなかでは、夏場はいかにして通風の良さを確保するか、冬場は厳しい底冷えを少しでも和らげることが、住宅建築の課題であった。平成の京町家でも、こうした機能において、先人たちの知恵を活かしたものになっている。

※平成の京町家、京都市が設ける「平成の京町家認定基準」等については<http://www.h-kyomachiya.jp/>を参照。